

北陸大学図書館報

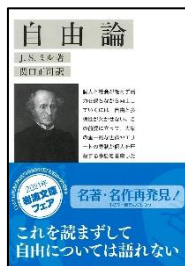
NO.51



◆◆無謬性の想定と公的討論——J. S. ミル『自由論』の現代的意義——◆◆

経済経営学部教授

松本 和彦



小説など文学作品であればなおさらだろうが、論文や著作の冒頭の文章にも多大な注意を払うものである。何度も書き直しをする。というのも、読者に読みたいという興味や好奇心を持ってもらわなければならないからである。

「私の著作のうち最善のものすべてに生氣を与えてくれた人、そして、幾分かはその著者でもあった人は、……真理と正義への高潔な感覚によって私をこの上なく力強く奮い立たせ、私にとって最高の報酬である賛同を与えてくれた。……本書を著したのは私とともに彼女でもある。……今ある形の本書は、ごくわずかではあるが彼女による校訂を経るという、計り知れない強みを持った。……彼女

女の比類ない英知による鼓舞や援助を受けずに私が書くどんなものよりも、世界にとって有益なものだろう。」

この文章はある著作の冒頭である。冒頭にこのような賛辞と感謝を述べ、彼女の思い出に本書を捧げると記している。これはきわめて異例と言ってもよいであろう。

私が学生時代にお世話になった倫理学の先生は「彼女も共著者なのだろうか」と少し不思議がっていた。当時の私も儀礼的な言辞ではないかと思っていた。しかし、今は事実だったのだと実感できる。

その著作とは J.S. ミル (1806-1873 年) の『自由論』(1859 年) である。彼女とはハリエット・テイラーのことを指している。ミルはテイラー夫人と 1851 年に結婚したが、彼女はこの著作が出版される直前の 1858 年に急逝した。冒頭の文章は最愛の妻に対する献辞の一部である。1873 年、ミルは息を引きとる少し前に娘ヘレンに囁いたと言う。「私は仕事をしたね。」

私が今でもミルに感謝の思いを持ち続けているのは、20 代のはじめに学問において迷っていたときに、かれの『自伝』(『ミル自伝』1873 年、朱牟田夏雄訳、岩波文庫、1960 年) を読んで励まされたからである。

人生を振り返ると多少の寄り道をしたかもしれない。それを嘆いても仕方がない。人生も晩年に近づくにつれて、自分は本来何をしたかったのか、今何をすべきなのか、自分にしかできないことは何なのか、という使命を改めて真剣に考えるようになるものである。逆算して残された長くはない時間を有意義に使わなければならないからである。限られた時間を有効に活用するためになすべき事柄に優先順位をつけることになる。もはや壮大な計画は立てられない。そして、焦る。

ミルは 1853 年肺結核に罹患し、死の恐怖を経験することになった。そして、著作活動にも優先順位をつけざるをえなかった。その優先順位の基準は「人間の知的・道徳的状態の改善」という観点から設定された。最優先順位の著作がまさに『自由論』である。この著作の主題は「市民生活における自由、社会の中での自由である。つまり、個人に対して社会が正当に行使してよい権力の性質と限界である。」(『自由論』J.S. ミル、関口正司訳、岩波文庫、2020 年、11 頁)

ミルは私たちの行為領域を本人にしか関わらない領域と他人に関わる領域とに峻別している。他人に危害を与える行為に対しては刑罰という法的サンクションや世論(社会的非難)という道徳的サンクションは認められる。しかし、他人に危害を与えない個人的行為に対しては認められない。ミルは、本人のために強制的に干渉するパターナリズム(父親的温情主義)を拒否している。ただし、この原理が適用されるのは成人としての能力を備えた人々だけである。つまり、子供や法定の成人年齢に達していない若者には適用されない。また、「多数者専制」、「社会的専制」、「政治的専制」、「エリート専制」、「英雄崇拜」に断固反対している。

ミルは社会による個人の自由への干渉を限界づける原理のことを「自由の原理」と呼んでおり、また他者への危害の有無を干渉の判断基準としていることから研究者の間では「他者危害原理」とも呼ばれている。

それではなぜ、ミルはこの原理が正当化できると考えたのであろうか。それは、その方が「進歩していく存在としての人間にとって永久に変わることのない利益」になるからである（30頁）。

ミルはJ. ベンサム（1748-1832年）の功利主義を修正したが、ベンサムと並んで功利主義哲学の代表的思想家である（「満足した豚であるよりも、満足していない人間がよい。満足した愚者よりも、満足していないソクラテスがよい。」『功利主義』初版1863年、関口正司訳、岩波文庫、2021年、31頁）。当然のことながら、『自由論』も功利主義哲学の原理に基づいて書かれた。

私も『自由論』は繰り返し読み直しているが、「自由の原理」ないし「他者危害原理」を具体的な問題にどのように適用すべきか、今日でも深く考えさせられる。この原理を改めて検討し直すことも『自由論』の現代的意義のひとつである。

しかし現在、私が特に関心を持っているのは「無謬性の想定」と「公的討論」のあり方である。これも自由の原理に劣らず現代的意義を持っているように思われる。ミルは第二章「思想と討論の自由」の中で、無謬性の想定に基づく思想、討論の自由を抑圧する考え方を批判している。

ひとつの問題についてさまざまな意見が存在するのが通例である。私たちが意見を表明するとき、どのような義務があるのであろうか。

「可能な限りで最も真理に近い意見を持つこと、慎重を期して意見を持つこと、また、正しいという十分な確信がなければ他人に自分の意見を押しつけないことは、政府および個人の義務である。」（47頁）

それでも私たちの間には多様な意見が存在する。まず、ミルは意見の多様性がなぜ有益なのかについて三つの場合を検討している（104頁）。

第一に、受け容れられている意見が誤っているかもしれない、したがって別の意見が真理であるかもしれない場合である。その意見が正しいのであれば、私たちは誤謬を真理に取り替える機会を得ることになる（42頁）。

第二に、受け容れられている意見が真理ではあるものの、その真理を明瞭に理解し深く感じ取るためには、対立している誤謬との対決が必要不可欠な場合である。真理と誤謬との衝突があれば、それによって真理はさらに明確に認識され、いっそう鮮烈な印象が得られる（42-43頁）。

第三に、対立する主張のうち一方が正しく他方が間違っているというのではなく、いずれもが真理の一部を含んでいる場合である。こういう場合は、広く受け容れられている主張の方も真理の一部しか含んでいないので、真理の残りの部分を補うために反対意見が必要となる。

ミルが指摘しているように、一方の主張がまったく正しく、他方の主張がまったく誤りであるというケースは稀であろう。それはなぜであろうか。ミルも述べているように、人間の知性というものはいつでも一面的であるのが通例で、多面的であるのは例外だからである（105頁）。

ミルは人類の精神的幸福にとって「意見の自由」と「意見を表明する自由」が必要不可欠であることを強調している。これらの自由は人類の他の幸福のすべてを左右することになるとも言う。ミルは具体例を援用しながら詳しく論じたあと、改めて上記の自由に対して四つの根拠を提示している（119-120頁）。

第一に、ある意見が沈黙を強いられているとしても、その意見は、もしかすると真理であるかもしれない。これを否定することは、われわれ自身の無謬性を想定することである。

ミルは無謬性の想定をどのように定義しているのであろうか。私たちが一般的に考えていることとは異なっている。ミルが無謬性の想定と呼んでいるのは、一つの主張（どんなものであれ）を確実だと感じる、ということではない。

「無謬性の想定とは、反対の立場から言えることに他の人々が耳を傾けるのを許さないまま、その人々に代わって問題の決定を引き受けることなのである。そのような形の主張は、たとえ私自身がいちばん真剣に確信している意見の側からの主張だったとしても、私は非難し拒否する。」（57頁）

また、次のように述べている。

「ある意見が誤りだと自分たちは確信しているからという理由で、その意見に耳を傾けようとしなないのは、自分たちの確信を絶対的確信と同じものだと想定することである。討論を沈黙させることは、すべての場合において、無謬性を想定することなのである。」（43-44頁）

つまり、自分の意見に対する反対論を許さず、しかも他の人々にそれを聞かせることを妨げ、独善的に問題を決定する態度をミルは批判しているのである。

人間は本性上、残念ながら誤りを避けることはできない（人類の可謬性）。それにもかかわらず、「人は誤りを正すことができる」優れた資質も持っている。しかし、そのためには討論と経験が絶対的に必要である、とミルは言う。

可謬性の自覚が「尊敬に値するすべてのものの源泉」であることを知っているにもかかわらず（49頁）、なぜそれを軽視する人々がいるのであろうか。おそらく瑕疵や欠陥、つまり誤りを認めてしまうと自分の権威が失墜するからであろう。ミルがここで批判の対象としているのは権威主義的な権威観であり、自分たちは無謬だから権威があり、権威があるから無謬であるとする想定なのである（『自由論』訳者解説、291頁）。つまり、自己欺瞞的思い込みである。しかも、その責任は回避する。

第二に、沈黙させられている意見は誤っているとしても、真理の一部を含んでいるかもしれないし、そうであるのがごくふつうのことである。また、広く受け容れられている意見や支配的な意見は、どんな問題に対する意見であっても、真理の全体であることはまれであり、まったくそうでないこともある。したがって、真理の残りの部分を補う可能性を与えるのは、対立する意見の衝突だけである。

第三に、たとえ、受け容れられている意見が真理であるばかりでなく、真理の全体であったとしても、活発で熱心な論争が許されず、実際にも、そのように論争されていなければ、その意見を受け容れているほとんどの人々は、意見の合理的な根拠を理解したり感じとったりすることが少しもないまま、偏見の形でその意見を信奉することになるだろう。

第四に、主張の意味そのものが失われたり弱まったりして、性格や行為に対する生き生きとした影響力を失う危険が出てくるだろう。

ミルは特に最悪なこととして、詭弁を弄すること、事実や論点を隠蔽すること、議論の要点をはぐらかすこと、あるいは、自分に反対する意見を歪曲して述べることでであると指摘している（121頁）。

先に討論と経験が絶対的に必要であると言ったが、道徳的な討論とはミルにとっていかなるものであろうか。

「自分の論敵やその論敵の意見の実像を冷静に見て取り、それらを歪曲せずに述べ、誇張によって論敵の信用を失墜させようとしたりせず、論敵に有利になることや有利になる可能性のあることは何も隠したりしない人がいたら、その人がどんな意見の持主であっても、応分の名誉を与えるべきである。

これが、公的討論の真の道徳である。」（124頁）

それでは、本当に信頼に値する判断をする人とはどういう人なのであろうか。ミルによれば、自分の意見の難点やそれに対するいかなる反論からも逃げずに、反対論者の議論を傾聴し、当たっている批判を素直に受け入れ、自分の意見に対する反論をすべて熟知し、その反論に対して再反論する習慣を身につけている人である。

まさにミルが指摘していることは正当である、と私は思う。だが、実際には実行するのはきわめて難しいのではなかろうか。

冒頭で小説に触れたが、作家村上春樹は小説を出版するまでに繰り返し、しかも徹底的に文章を書き直し、全体の構想を練り直している。そして、ある程度書き直しが済んだ段階で第三者に意見を求めている。最初に読んで意見を述べるのがかれの妻である（『職業としての小説家』村上春樹、新潮文庫、2016年、156-159頁）。

論文や著作を執筆し、出版するとき編集者はとても重要で不可欠な存在である。校正するだけでなく、その作品の構成や文章表現などさまざまな視点から貴重な示唆を与えてくれる。そして、共同してより良い作品を作り上げてくれる。しかし、編集者に作品を提出する前にあらかじめ作品を真剣に読んで細かい点にいたるまで忌憚のない意見を述べてくれる第三者がいることは理想的である。討論だけでなく、著書や論文を執筆するときにも無謬性を想定することなく、人類の可謬性を想定しなければならぬ。ミルにはテイラー夫人という優れた知性を備えた校訂者がいたことはうらやましい限りである。学生のみならず卒業研究や卒業論文の執筆のときに、そのような第三者がいることはとても重要である、と私は思う。

◆◆ これからの図書館の活用法 – ことばの仕組みから考える ◆◆

医療保健学部教授

二ノ倉 欣久

ヒト最大の高次脳機能として知られる言語は①話す、②聴く、③読む、④書くの四つの側面から構成されます。脳の特定部位が損傷されると、獲得された言語機能が障害されます。これが失語症です。失語症の患者さんはいへん多彩な症状を示しますが、これらの4領域にまたがる障害が生じることで特徴づけられます。一旦獲得したことばを喪失すると、患者さんは自身の人格（パーソナリティ）の核心部分を喪失したかのような衝撃を受けることとなります。ことばがヒトを人たらしめるはたらきとされるところです。また言語を構成する4領域と関連が深いはたらきとして⑤計算もしられており、数

を操る能力を喪失した状態は失算と呼ばれます。失算と失語の間には、大脳の機能局在の点においても、また患者さんの示す徴候の面においても不思議な連関があり、数を操作する能力が霊長類の言語獲得の萌芽となったのではないかと、というたいへん魅力的な仮説もあるほどです。

寄稿の機会をいただいたことを契機にこれからの図書館活用を考えてみました。図書館といえば書物を大量に所蔵するはたらきがすぐ思いつきます。しかし、本当に重要な価値は、単に図書が収蔵されている状態そのもののでしょうか。おそらく違うはずです。書物のもつ本質的に重要な力は、読んだ後で読み手の行動を変える駆動力ではないでしょうか。上記の①～⑤のはたらきを高めるようなはたらきこそ、これからの図書館に求められているように思います。ヒトを人たらしめるはたらきがより高まる方向にギアチェンジした図書館をイメージとして喚起すれば、おもいがけないヴィジョンがひろがるかもしれません。そこで、思いつくままに列記してみます。

図書館はこれまで③や②に代表される情報の入力面を重視してきました。図書館が①や④をはじめとすることばにまつわる出力面を重視したら、社会はどう変わるでしょうか。なるほど①については小児を対象とした読み聞かせなどは萌芽的に取り組まれています。これらをさらに拡張利用できる余地はあるかと思えます。個人的には地域の高齢の方々の、見てきたことや聞いたこと、そんなエピソードのかずかずが、彼らの発話の低下とともに、その記憶痕跡が消えていくことに歯がゆい思いをすることがあります。技術革新によりこれほどまでに情報の収集や保管が容易になった今、彼らの記憶痕跡を収蔵する方法はないのでしょうか。そのような活動を通じて高齢者自身の話す力が高まる、そんな図書館があったとしたら、素敵な図書館になると思いませんか。④は図書館に温存された特技かと思えます。受験生が鉛筆を走らせることだけに、特技が活用され、図書館の持つ本質的に重要な機能が眠ったままだとしたら、勿体無いではありませんか。

最後に⑤、数の操作とことばの操作がわれわれの脳内過程で密接に関わる以上、これからの図書館は⑤をより求められるのではないのでしょうか。ここでいう計算とは単なる四則演算でもなければ、デジタルデータの蓄積でもありません。勘定(Computation)の意味です。書物は読後に読者の行動を変容させる駆動力として用いられることを再確認しておきたいと思えます。例えば、自分が収集したデータをどのように加工し、意思や意見の表出に反映させるか、についての手続きを蓄積し、活用することのできる図書館はこれからの社会に不可欠になるでしょう。場合によってはその蔵書は紙に印刷された文字列ではなくなるのかもしれませんが。計算機の内部には、ライブラリーとよばれる特定の手続きをモジュール化した一連のプログラムがあります。膨大な情報を集約し貯蔵することが容易になった現代において、そのようなデータを加工するための知恵が集約されている図書館の未来は上記ライブラリーの充実にこそあると思うのです。

◆◆ 「本」は時を超える情報源 ◆◆

国際コミュニケーション学部准教授

轟 里香

友達と話をすることは楽しい。楽しいだけではなく、話をすることで、自分が持っていない情報をその人から得られるかもしれない。人間は、物理的・時間的に、自分で経験して知ることのできる情報は限られている。例えば、美味しいレストランがどこにあるか。全部のレストランに行つて確かめてみることはもちろんできない。友達は、新しい美味しいお店を知っていて、教えてくれるかもしれない。このように、他の人と会話すれば、その人の経験を伝えてもらうことができ、情報量が増える。

だれでも、友達の数に限られているが、今はインターネットという非常に強力なツールがある。これにより、会ったこともない人の経験でも知ることができる。良いお店を見つけたくて食事処の情報サイトを調べたことのある人は多いだろう。このように、他の人とのコミュニケーションは、生活を豊かにする上で非常に重要である。

インターネットを使えば、交流できる人の数は格段に増えるが、それでも限界はある。そのようにして交流できる人は、現在生きている人(あるいは最近まで生きていた人)に限られるだろう。過去に生きていた人と交流して、その知識をもらう方法はあるだろうか。言語が音声だけのものであったならば、それは不可能である(インターネットもそうなのだが)。人間は、はるか昔から、書いて記録するために言語を用いてきた。その多くは、「本」の形で今も手にすることができる。本を読むことによって、百年昔に生きていた人とでも時を超えて言わば「話」をすることができるのである。

現在、世界は新型コロナウイルス感染という深刻な状況のただ中にある。この問題に関連して、「スペイン風邪」という過去の出来事がしばしば引き合いに出される。「スペイン風邪」に限らず、人類は長い歴史を通じて様々なことを経験して

おり、類似した出来事が繰り返されることもある。また、時代が変わっても、人間には本質的に変わらない部分がある。現在起こる様々な問題は、解決のヒントが歴史の中にあるという場合も多いのである。これは、世界的な問題のみならず、個人的に経験するような問題にもあてはまる。

「歴史」にあまり関心がなく、「そんな古いこと」と思う若者もいるようである。しかし、あなたが会おう問題のほとんどは、過去に誰かが経験しているのである。過去の記録を紐解けば、現在抱えている問題の解決のヒントが得られる。そういう観点から歴史を見てほしいと思う。自分の限られた経験、あるいは友達からの限られた情報だけで試行錯誤を繰り返して、痛い思いをして学ぶ必要はないのだ。「歴史」は人類が築いてきた大きな資産であり、本を読むことでその資産を活用することは、これまで生きてきた人々に対する敬意を示すことでもある。

◆◆ 本がある生活 ◆◆

薬学部 薬学科 3年次生

宮崎 琴音

あなたの趣味は何ですか？私は本が好きなので、いつも「読書です」と答えていました。よくあるフレーズですよね。しかし、同様に典型的な回答の「音楽が好き」「マンガが好き」「スポーツが好き」に比べて、本や読書は固い、難しい、まじめで勉強熱心といった反応を受けやすい気がします。そんなことから「本が好き」というのがはばかられた時期もありました。私はマンガも大好きで、本はマンガと同様に娯楽の1つと思っています。しかし残念なことに、「本が好き」と「マンガが好き」の間には溝があるのが実情ではないでしょうか。マンガが広く世の中の人に受け入れられるのに対して、本は嫌いな人から徹底して避けられているように思うのです。そんな少し気の毒な「本の良さ」を、この場所をお借りして考えてみようと思います。本が苦手な方の心に「本、いいかも」と関心が湧き、本好きの方が改めて本の良さを再発見するきっかけになればいいなと思います。

「本の良さ」の1つ目は自分の知らない世界を体験できることです。娯楽ですから、人によって好みも本との相性もバラバラです。本好きを名乗っていますが、正直に言うと専門用語が多くて読む気が失せた本や物語の途中で飽きた本もあります。しかし、その中から自分に刺さる特別な一冊に出会えた時の感動は格別です。「見つけた！」と心の底からいろいろな感情が沸き上がってきます。ぜひ、本って面白くないなと思う方にこの体験をしてほしいです。また、物語を楽しむ娯楽として他にマンガやアニメが挙げられると思いますが、それぞれに違う良さがあると思っています。例えばマンガであれば絵によって作者のイメージを捉えやすく、アニメになるとさらに声優の方の演技やアニメーションによって臨場感あふれる物語の疑似体験ができます。本ならではの良さは、物語を自分のペースで読み進められること、イメージを自分の中で自由に持てることだと思います。アニメも好きですが、せっかちな私は時々「このシーン長いな」などと思ってしまいます。その点、本は味わいたいところゆっくりと、進めたいところはサクサクと物語を進めて自由気ままに楽しめます。また、私は絵が好みでないマンガを避けてしまっていますが、本ならその心配はありません。選びたい放題・読みたい放題です。マンガを読む方には共感していただけるのではないのでしょうか。

「本の良さ」の2つ目は、自分の身に起きた問題解決の手段になることです。例えば人間関係で悩んだとき、何らかの知識を得たいとき、本は最高のパートナーになってくれます。世界に本は何冊存在するかご存じですか？2010年の古いデータですが、その時点で約1億3000万冊だそうです。私の好きな言葉の1つに「あなたの悩みは先人たちが解決済み」がありますが、最先端の研究内容でない限り、概念的な問題や思想は考え尽くされていると言っても過言ではないです。私は何か問題や悩みにぶつかったときは特効薬かのように、浴びるように本を読み漁って解決しています。本を読もう！と決めるだけで過去も国も人種も年齢も飛び越えてつながり、人生を彩るストーリーや知識と出会うチャンスを掴めるのです。そう考えるとなんだかワクワクしてきませんか？また、最近ではインターネットで検索できるから（本は不要）という声もよく聞きます。確かにすぐ答えらしきものを発見できてとても便利だと思います。しかし、池上彰さんが「インターネットは正しい情報も偽物も混在して玉石混交だ。上級者向けの情報源であることを忘れないで」と述べているように、得た情報が本当に正しいのか判断する必要があるのがネットの世界です。さらに、私はついネットサーフィンをしては膨大な情報の波に飲み込まれ、「気づいたら時間が経っている」ことがよくありました。その点、本は作者が気合を込めて集約した1冊に情報が精査されて詰まっていますので安心して知識を集められますし、ネットの海を当てもなく漂流するより本1冊を集中して読む方が近道に思えます。

さて、ここで私が普段利用する薬学図書館の魅力を紹介したいと思います。薬学図書館は木を基調としていて、とても落ち着ける空間です。マンガ、小説、ビデオ、雑誌、専門書と幅広く蔵書があります。アニメ化された「はたらく細胞」やドラマ化された「アンサンングシンデレラ」など流行の本も取り揃えてあるので、本が得意でない方もぜひ足を運んでいただきたいです。私は電子書籍や本の読み放題サービスも利用していますが、本を一覧して選べるのは図書館ならではの魅力だと思います。本を選ぶとき、どれを読めばいいのか悩んだ経験はありませんか？実際に図書館を探索していれば、表紙の感じやタイトルからビビッとくるものがあると思います。また、本学図書館では読書感想文コンクールや選書会、本の福袋などの様々な企画やイベントがあります。私は1年次、2年次と読書感想文コンクールに応募しましたが、そこで私の人生に影響を与えてくれた1冊と出会いました。コンクールは本を読むきっかけや1冊の本とじっくり向き合う貴重な経験になりました。Instagramも始まったのでイベントをチェックして参加するのも読書生活を楽しむ一つの手かもしれませんね。

さて、長くなってしまいましたが、本を読んでみようかと少しでも心が動いてくだされば嬉しいです。本がある生活を本学の図書館から始めてみるのはいかがでしょうか？そして改めて、心の底から伝えたいです。

「本、いいよ！」と。

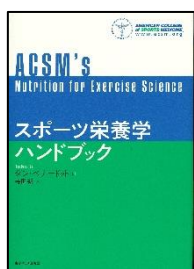


薬学部分館3階
ブラウジングコーナー

◆◆ 図書館利用について ◆◆

経済経営学部 マネジメント学科 3年次生

室木 修幸



私は今まであまり図書館を利用してきませんでした。本を読むことは好きですが、わざわざ図書館まで足を運んで本を読むことはありませんでした。ごくたまに課題をするために図書館に足を運ぶ程度しか利用していませんでした。

しかし、今回図書館報に載せる文章を書いてほしいと依頼され、改めて図書館の利用について考えてみました。最近の若者は本を読みことを避けているように感じています。本を読みことを嫌い、スマホやゲームなどをして遊んでばかりいます。私の友人にも本を読ませてみると、2ページで力尽きてしまう人が多いです。

本は、自分の考え方や物事を見る視野を広げてくれるものであると考えています。また、様々な知識を与えてくれるものでもあります。短い人生の中で、人間が1人で得られる知識や知恵には限界があります。そんなときに、本を読むことで先人の知識や知恵を得ることができます。自分の人生を劇的に変えてくれる本がどこかに存在しているのです。私は本をたくさん読むことで、自分の人生を豊かにしてくれると考えています。

私は、高校生の頃本の中でもライトノベルをよく読んでいました。これは娯楽小説であり、知識を得るための本とは別物です。私は中学生の時に図書室においてあったライトノベルを試みに読んでみたところ、読みやすい物語に引き込まれ夢中になりました。高校に進学すると部活動のレベルが上がり、新しい環境に慣れるのが大変でした。毎日遅くまで練習して、家に帰って倒れるように眠るという生活が続きました。慣れない環境と辛い部活動のせいでどんどんストレスが溜まっていきました。そんなときに図書室においてあったライトノベルは、私のストレス発散に大いに力を発揮しました。本を読んでいるときは嫌なことや余計なことを考える事なく、自分の世界に入り込むことができました。本を読むことでストレス発散をすることができ、高校生活を乗り越えることができました。この経験から、本を読むのは知識や視野を広げるだけでなく、辛いことがあったときの支えにもなるのだと知りました。

また、図書館は本を読む以外にも課題や、レポート作成の場として利用することができます。図書館は大学の敷地内でも最も静かで落ち着いた雰囲気がある場所です。騒がしい場所では集中しようにも気が散ってしまいます。私も食堂などで課題に取り組んでみたことがあります。しかし、食堂は多くの人が訪れ会話をしているのでとても騒がしくなっていました。一方で、図書館はとても静かで課題やレポート作成に取り組むのには最適な場所でした。図書館で課題をすることで自分の集中を乱してくる要因を限りなく少なくすることができました。他にも、疑問に思ったことはすぐに調べることができます。スマホで手軽に調べられることもできますが、本のページをめくって自分で答えを探すのが大切だと思います。

私は今まであまり図書館を利用してきませんでした。しかし、これからは卒業論文など調査研究を行う課題が多くなってきます。そのため、これを機に図書館を頻繁に利用していこうと思います。特に卒業論文ではスポーツに関することを書こうと考えているため、スポーツ栄養学など本の利用、また CiNii Articles などの検索サイトを利用し、様々な文献を調査したいです。

◆◆ 私が感じた北陸大学図書館 ◆◆

国際コミュニケーション学部 心理社会学科 1年次生

矢口 綾乃

私は入学してから時々、図書館を利用しています。空き時間や誰かを待っている時間に何気なく立ち寄ったり、勉強したり、本を読んだりしています。

北陸大学図書館は、小説などの蔵書は市立図書館よりも少ないですが、各学科に関する書籍が充実していると感じます。私は心理社会学科ですが、これほど自分の好きな分野の本がある図書館はとても嬉しく、また学習の際にとっても助かります。また各分野の難しい専門書ばかりではなく、読みやすく興味深い本も揃っているので、バスまでの時間などでも、立ち寄ってみるのもいいと思います。自分の好きな学問への興味が増してさらに学習が楽しくなると感じます。

私は小説が好きなのですが、金沢市立図書館と比べると蔵書は少なめだと感じます。しかし、1階と4階にある小説コーナーに立ち寄ると、その中に掘り出し物の面白い本が見つかるので満足しています。タイトルを読んで、冒頭を読んで、本を読み漁っている時間がとつても楽しいです。蔵書が少ない分、じっくり見て回りながら、色んな作家さんと出会いやすい気がしています。

勉強場所としての図書館ですが、よい環境だと思います。個人ブースは集中して一人の空間になり、各部屋は授業のない時に広々使えます。また勉強や読書だけでなく、居心地が良いため、ついついっくつろいでしまいます。

北陸大学図書館の外観は静かな感じで建っていますが、中は木の温かみがあり、優しい感じで居心地がよいです。

これからの4年間、図書館では小説や心理学の専門書のみでなく色々な本と出会うことにより、私自身の見聞もさらに高めていきたいと思っています。

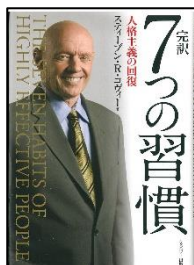


本館4階
心理社会学科関係の図書

◆◆ 私が実践している7つの習慣 ◆◆

医療保健学部 医療技術学科 4年次生

喜多 慎太郎



はじめまして、医療保健学部4年の喜多慎太郎と申します。今回は、私が大学生の間に一度は読んでおくべきだと感じた『完訳 7つの習慣 人格主義の回復』（フランクリン・コヴィー・ジャパン訳、キングベアー出版、2013年）についてご紹介したいと思います。

本書の内容を一言で言いますと、「成功するためには、どのような考え方にに基づき行動すべきか」について述べられており、筆者のスティーブ・R・コヴィー氏は成功にまつわる基本的な原則を「7つの習慣」として提唱しています。7つの習慣は、私的 success のための第1から第3の習慣、公的 success のための第4から第6の習慣、再新再生のための第7の習慣と大きく3段階に分類されています。

これらの習慣を意識する前に大前提として「インサイド・アウト」という考えが重要とされています。

人は誰しも、過去の経験や知識をもとに物事を捉えてしまい、自分の見たいように物事を見てしまうと思います。このことに気づかなければ、自分の正しさを疑わず物の見方が狭くなってしまい、失敗をすれば、他人や環境といった自分の外側（アウトサイド）に原因があると考えてしまいます。筆者は、真の成功と幸福に導くためには自分の内面（インサイド）を変える必要があると考えており、これは考え・見方・人格・動機が原則に合っているか気を付け、行動を変えることで結果を引き寄せるという姿勢が重要であると示しています。筆者はこのような姿勢について、「インサイド・アウトとは、一言で言えば、自分自身の内面から始めるという意味である。内面のもっとも奥深くにあるパラダイム・人格、動機を見つめるこ

とから始めるのである。」と説明しています。つまり、物事の見方や捉え方を変えなければ、周囲の物事も変わらないため、常に自分の中に改善点があると考えることが自己成長を図るうえで大切であるといえます。

私自身、これまで読んだ本の中で、最も良い影響を受けた一冊だと感じています。大学生の間は、自分から行動しなければ、誰も物事の捉え方や考え方について教えてくれることはありません。だからこそ、大学生の間に本を読むことで様々な価値観や考え方を身に付けることが必要だと思っています。本書の内容は、実践的かつ現実的な面が強く、成功に結び付く具体的な7つの方法が記されているので、ご興味のある方は一度読んでみてはいかがでしょうか。

私自身、本書で紹介されている第1～7の習慣について以下のように実践しています。

第1の習慣<主体的である>

- ・他人や環境に流されることをやめ、自覚して自身の行動を選択すること。

第2の習慣<終わりを思い描くことから始める>

- ・人生の終わりを意識し、どのような人生を送るのかの方向性をイメージし、それを実践すること。

第3の習慣<最優先事項を優先する>

- ・緊急事項よりも重要事項を優先して行えるように意識し、「緊急でないが重要な活動」を増やすことができるように努力すること。

第4の習慣<Win-Winを考える>

- ・双方に利益をもたらす解決策を常に考え、信頼感を深めるようにすること。

第5の習慣<まず理解に徹し、そして理解される>

- ・自分を理解してもらうため、自分の主張や相手の批判よりも先に、相手の考え方を理解することから始めること。

第6の習慣<シナジーを創り出す>

- ・お互いの妥協点を探るのではなく、お互いの相違点を生かす発想を持つこと。

第7の習慣<刃を研ぐ>

- ・第1～6の習慣の効果をさらに発揮させるため、自分への投資を日々続け、自分自身の肉体、精神、知性、社会・情緒を再新再生（リニューアル）させること。

◆◆ 寄 贈 図 書 ◆◆

本学の役員・教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

自著・共著・編集・翻訳の寄贈		寄贈者
自著： 近世史研究叢書7『近世立山信仰の展開 ：加賀藩芦峯寺衆徒の檀那場形成と配札』	1冊	福江 充（国際コミュニケーション学部教授）
編集： 『最新尿検査：その知識と病態の考え方』第3版	2冊	油野 友二（医療保健学部長・教授）
共著： 『基礎から学ぶ統計解析：Excel2010対応』	1冊	杉森 公一（高等教育推進センター長・教授）
翻訳： 『ROBOT-PROOF：AI時代の大学教育』	1冊	杉森 公一（高等教育推進センター長・教授）
翻訳： 『中国近世財政史研究：中国近世財政史の研究』	1冊	付 勇（国際交流センター准教授）

書 名		寄贈者
『百万石の留守居役』（全17巻）他	計125冊	泉 洋成（理事）
『アメリカ憲法』他	計9冊	佃 貴弘（経済経営学部講師）
『ザ・ヘイト・ユー・ギヴ：あなたがくれた憎しみ』他	計9冊	堀川 靖子（教務課長・IR室課長）
『新史 太閤記』（上・下）他	計36冊	田邊 良和（図書館事務課長）
『不況に克つ12の知恵』他	計8冊	干場 聡史（アドミッションセンター参与）
『ニガテを克服！ここからはじめる臨床検査の計算入門』	計1冊	竹井 巖（学外講師）

北陸大学図書館報 NO. 51 令和3年11月30日発行
編集・発行：北陸大学図書館 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1 TEL. 076-229-3021 FAX 076-229-4850
Eメール：lib@hokuriku-u.ac.jp 北陸大学図書館ホームページ：<https://www.hokuriku-u.ac.jp/about/campus/library/>

長期ビジョン 北陸大学 Vision50 (by2025) ……2025年までに学生の成長力No.1の教育を実践する大学となる。